

京都大学教育研究振興財団助成事業 成 果 報 告 書

平成27年2月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 工学研究科

職 名・学 年 准 教 授

氏 名 田 路 貴 浩

助 成 の 種 類	平成26年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成			
研究 成果 物 名	日本風景史			
著者・編著、作成者全員の所属・職 ・ 氏 名	田路貴浩・京都大学大学院・工学研究科・准教授 齋藤潮・東京工業大学大学院・社会理工学研究科・教授 山口敬太・京都大学大学院・工学研究科・助教 著者 : 岩本馨・京都工芸繊維大学大学院・工芸科学研究科・講師 加藤悠希・竹中大工道具館・研究員 是澤紀子・名古屋工業大学大学院・工学研究科・准教授 清水重敦・京都工芸繊維大学大学院・工芸科学研究科・准教授 田中明・武庫川女子大学・生活環境学部・講師 豊川斎赫・小山工業高等専門学校・准教授 西村謙司・日本文理大学・工学部・准教授 野村俊一・東北大学大学院・工学研究科・助教 林倫子・立命館大学・理工学部・助教 吉村晶子・千葉工業大学・工学部・准教授			
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配 布 先	
	昭和堂	2015年2月27日	一般書店にて販売(ただし、著者の原稿料・印税はない)	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。			
会 計 報 告	事業に要した経費総額	2,430,648 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	日本学術振興会科学研究費補助金 研究成果公開促進費		
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	組 版 代	1,028,000	1,000,000	
	製 版 代	313,000	0	
	刷 版 代	164,000	0	
	印 刷 代	184,000	0	
	用 紙 代	288,000	0	
製 本 代	273,600	0		
消 費 税	180,048	0		
合 計	2,430,648	1,000,000		
当財団の助成について	本書の中心的な編者は京都大学の教員であり、また執筆者の多くも京都大学の出身者ですが、他大学の出身者も含まれています。にもかかわらず、助成事業に採択していただき感謝しています。京都大学の教員が中心となる学術研究グループの成果が公表されることは、京都大学が学術研究の各分野でイニシアティブをとっていくためにたいへん重要なことだと感じています。また、今回は日本学術振興会の研究成果公開促進費にも採択されました。ふたつの助成を受けるのはたいへん珍しいと数名の方から伺いましたが、重複採択をお認めいただいたことにつきましても感謝しています。			

本書は日本人が見てきた、あるいはつくり出してきた風景について、古代から近代までの事例を通覧しようとするものである。これまで限られた一定の時代の風景については多くの論考が著されてきた。しかし、いまだ通史は編まれていない。建築史や庭園史では通史が存在するが、風景史には存在しない。それは風景史の対象が多岐に広がっていることが主な要因であろう。本書に収録された事例も建築物、庭園、土木構築物があり、祭祀や習俗など無形のものにまで及んでいるが、それらは必ずしも時代の代表例ではない。本書は、時代のピークを連ねて歴史を貫通する単独のパースペクティブを提示するのではなく、時代を異にする事例のあいだで共通性や異質性が多様に解釈できることをねらいとした。

そのために「ヴィジョン」という視点が導入されている。風景には見られる風景と、造りだされる風景があり、見ることと造ることは相互に関連している。このつながりを照らし出す視点が「ヴィジョン」である。例えば、極楽、山水などは眼前の風景の彼方に見られるヴィジョンであり、それらを目ざして新たな風景が生みだされた。本書はこの「ヴィジョン」を、風景史の記述の視点に据え、多様な事例の関連づけを試みている。「ヴィジョン」という語は日常的に頻繁に使用されるが、学術用語としてはほとんど規定されてこなかった。そうしたことから、この試みは大きな学術的意義を有すると言えるだろう。

各章の概要は下記のとおりである。

序論 生きられる風景とヴィジョン：ヴィジョンとは象徴的で想像的な像であり、それは風景の彼方に見られたり（カミ、極楽）、風景を創造する際に先取りされたりする（国土計画）。近代的理性はそれを表象という操作対象にしてきた。しかし、そうした表象化の営みは部分に限定されてきたが、いまや人間と環境の全体的なヴィジョンの構想とその構想を描くための技法が求められている。

第1章 古代祭祀の場：ヒモロキ・サカキ・イワサカなど、カミを祀るための古代祭祀の場が論じられる。『古事記』、『日本書紀』を素材に、建築史学、考古学、民俗学の知見を参照しながら、カミという霊的ヴィジョンを顕現させるための場の様相が示されている。

第2章 古代の都城：中国の都城という理念が平城京に移されると、既存道路や地形条件への適合によって都城の形式は変化し、さらに条里制の宅地は水田化していった。理念が生きられることによって変容し、都の風景が生成されていった。

第3章 古代の浄土と建築：平等院の4つの風景、宇治川の対岸からの風景、阿弥陀堂の周囲の風景、阿弥陀堂内部の風景、池越しに阿弥陀堂と対面する風景が論じられている。そして、それらが極楽浄土というヴィジョンへいかなる仕方で差し向けられていたか詳述されている。

第4章 中世禅院の山水と夢窓疎石：禅僧たちは境内が造営されると、偈頌と呼ばれる漢詩を唱和して境内の風景を賞賛した。遠方の禅僧の多くは境内を実見せずに偈頌を寄せたが、それは彼らが山水というヴィジョンを共有していたため可能であった。

第5章 近世の離宮：後水尾院は王朝文化の再興に努め、修学院離宮を造営し、修学院十境、修学院八景をつくらせた。それらは古典の風景を離宮の個別の風景に詠うことによって、修学院の風景に時代を越えうる普遍性を志向していた。

第6章 近世の都市巡礼：巡礼は一巡することによって曼荼羅の世界像などを体験するものであった。それが江戸期に至ると世俗化され、都市を周回する娯楽の観を呈する。庶民たちは、都市拡張の時代に、都市の全体像を体感しようとしたのであった。

第7章 近世の神社景観：三輪山はそもそもカミというヴィジョンの顕現の場であった。その後次第に人が入るようになり、山が荒らされていくと、近世には山林保護を目的に禁足の領域が制定された。さらに山と社殿全体が禁足山へと移り変わり、それが神体山として崇められることになる。

第8章 近世-近代の野と名所：京都嵯峨野に再生される文芸世界が論じられる。そもそも穢れの間であった野は幽閑の隠遁地であり、古典文学の舞台とされてきた。それが近世以降、名所として再興される。そこには根源的な自然へ通じる野というヴィジョンが潜在していた。

第9章 近代の都市河川：江戸期の京都の鴨川は河川敷のなかに出店が建ち並び、遊興の間として利用されていた。近代になると、「山紫水明」という環境ヴィジョンが語られるようになり、運河計画と河川改修を梃子に、河川内の出店は排除され、風致の整備が進められる。

第10章 戦後の国土と都市：丹下健三はアメリカ滞在中に、都市と国土のヴィジョンを構想する技法を学んだ。帰国後、その技法によってヴィジョンが描かれ、大阪万国博覧会に結実する。群衆の流動を観察する技法が活用されながら、お祭り広場が生みだされ、未来の風景が創出された。

第11章 住まいと故郷：武者小路実篤は家を自己の延長として語り、藤沢周平は故郷の山々を内面化し、芥川龍之介は関東大震災後の故郷喪失感を書きとめた。これら文学テキストから、人が取り巻く環境に住み着くことで生成する住まい・故郷というヴィジョンが論じられる。

第12章 風景論の展開：近年の風景論が包括的にレビューされる。そして、風景を先在的なものの見方とする「見る」風景論、積極的に読み解くものとする「読む」風景論、日常に潜在する「見えない」風景論など、風景論の類型が提示される。